

# 保険・年金 フォーカス

## 東南アジアの保険市場概況

— 経済発展・中間層の増加に伴い生保市場が拡大 —

保険研究部門 兼 経済調査部門 平賀 富一  
(03)3512-1822 hiraga@nli-research.co.jp

### 1 | 東南アジア生命保険市場の近況と特徴

東南アジア（ASEAN（東南アジア諸国連合）の加盟諸国を対象とする）の生命保険市場の近況や特徴点を以下に述べる。

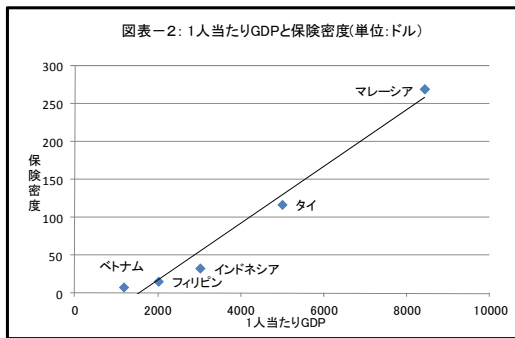
図表-1 東南アジア(ASEAN諸国)の経済・生保の主要指標(2010年)

単位	人口 億人	名目GDP 10億ドル	一人当たりGDP ドル	生保収入保険料 百万ドル	保険密度 ドル	保険深度 %
シンガポール	0.05	223	43,117	9,343	2101	4.57
ブルネイ	0.004	13	31,228			
マレーシア	0.28	238	8,423	7,551	270	3.04
タイ	0.64	319	4,992	7,997	117	2.51
インドネシア	2.34	707	3,015	7,744	33	1.10
フィリピン	0.94	189	2,007	1,494	16	0.75
ベトナム	0.88	104	1,174	1,077	8	0.70
ラオス	0.06	6	984			
カンボジア	0.61	43	702			
ミャンマー	0.61	43	702			
合計	6.0	1,852		35,206		
参考)日本	1.27	5,459	42,820	448,206	3530	8.17

(資料) 経済指標に関するデータは経済産業省「通商白書2011年晩」、生保に関するデータはスイス再保険会社「Sigma No2/2011 Statistical appendix, 2012年1月」をもとに筆者作成。  
保険密度：一人当たり収入保険料、保険深度：収入保険料の対GDP比。

図表-1は、ASEAN 諸国の経済と生保市場関連の主要指標をまとめたものである。地域計で、人口が約 6 億人、経済規模（名目 GDP）が日本の 1/3 に達している。生保収入保険料は約 352 億ドルと、中国の 1,430 億ドル、インドの 638 億ドルとの比較では小さいが、その生保市場は順調に成長を続けており、2010 年は 2000 年対比で 4 倍強の規模に拡大している。

他方、同市場を見る場合には、諸国の経済発展度の違いに注目することが必要である。その点で、国際的に有力な金融センターおよび地域における事業活動の統括拠点として、一人当たり GDP がわが国を上回る状況に達し、保険密度（一人当たり収入保険料）、保険深度（または保険普及度：収入保険料の GDP 対比）が欧米主要国と並ぶ水準に達しているシンガポールや、人口が僅少なながら豊かな資源国であるブルネイを別格として、中進国として存在感を増すマレーシア・タイ・インドネシア・フィリピン・ベトナムの 5 カ国、今後の経済発展が注目されるが、一人当たり GDP が 1000 ドル未満であるラオス・ミャンマー・カンボジアの ASEAN の後発加盟 3 カ国というグループに大別されよう。その中で、シンガポールについては、人口は少ないもののアジア地域で最も経済発展を遂げた国の代表例であり、ユニット・リンク等投資型商品を含め生保の普及度も高く洗練された市場となっている。一方、ラオス・ミャンマー・カンボジアの 3 国については今後の発展は見込まれるが未だ市場は小さい。以下では、東南アジア地域の典型的な市場と考えられるマレーシア・タイ・インドネシア・フィリピン・ベトナムの 5 カ国を中心に述べることにしたい。



図表-2は、上記5カ国の一人当たりGDPと生保の保険密度（一人当たり収入保険料）の関係を示したものである（使用データは図表-1と同じ）。一人当たりGDPの規模と保険密度の相関性が分かる。上記2つの指標はシンガポール等経済発展度合いがより高いアジアNIES（新興工業経済地域）の水準に比べて低位にあるが、それだけに今後の大きな伸びが予期しうると考えられる。

これら5カ国に共通する特徴は、養老保険等伝統的商品のウェートが高い中、投資型商品の販売が増加しつつあること、販売チャネルとしてはエージェントの位置づけは依然大きいものの銀行を通じた保険販売（バンカシュアランス）が重要なポジションを占めるようになってきていることである（新規契約に占めるバンカシュアランスの割合は、マレーシアで約5割、インドネシアが約3割という水準になっている）。各国で外資企業がマーケットシェアの過半を占めており、これら企業が様々な商品や販売手法を導入し市場に影響を与えている。またマレーシアやインドネシアというイスラム教徒の多い国では、タカフル（イスラム保険）の販売が増加している。

## 2 | 市場拡大の重要な要因－経済発展による中間層の増大や人口動態について

図表-3（資料）アジア開銀「Asian Development Outlook」2012年4月）

	実質GDP成長率(%)の推移・見込み					
	08	09	2010	2011	2012	2013
シンガポール	1.7	-1.0	14.8	4.9	2.8	4.5
タイ	2.5	-2.3	7.8	0.1	5.5	5.5
マレーシア	4.8	-1.6	7.2	5.1	4.0	5.0
インドネシア	6.0	4.6	6.2	6.5	6.4	6.7
フィリピン	4.2	1.1	7.6	3.7	4.8	5.0
ベトナム	6.3	5.3	6.8	5.9	5.7	6.2

上記5カ国について経済成長の状況を見ると、97-98年のアジア通貨・金融危機により大きなダメージを受けたもののその回復過程で多くの国で経済構造の強化が図られている。図表-3にあるようにリーマンショック後にはマイナス成長を記録した国も一部あるが各国の経済は概ね堅調に推移しており今後

も成長の継続が見込まれている。そのような状況下で5カ国計の経済規模（名目GDP）も、2000年/2010年の対比で3倍以上に増加している。かかる経済発展の中、図表-4にあるように、各国の人口の中で中間層が顕著に増加しており、テレビ等家電製品、携帯電話など耐久消費財や、生命保険商品を含むサービス商品の重要な顧客としての存在感を増してきている。特に、人口規模が大きく、「人口ボーナス」（人口構成で子供・老人が少なく生産年齢人口が多い状態）が長期間続くと見込まれるインドネシア、ベトナム、フィリピンは市場の拡大の可能性がより大きいと考えられる。

図表-4 アジアの中間層の推移と見込み

（単位：億人）

	2000	2005	2010	2015	2020
ASEAN	1.1	1.5	2.5	3.3	4.1
インド	0.4	1.0	1.9	3.5	6.2
中国	0.7	2.2	5.0	7.7	9.7

備考：1. 世帯可処分所得の家計人口。ASEANはシンガポール・マレーシア・タイ・インドネシア・フィリピン・ベトナム。

2. 各所得層の家計比率×人口で算出。

3. 中間層とは、世帯年間可処分所得が5,000ドル以上35,000ドル未満の所得層。

（資料）経済産業省「通商白書2010年版」（元データはEuromonitor international2010）。

### 3 | 今後の展望等

以上、東南アジア生保市場の概況等について述べた。各国でさらなる経済発展が見込まれており、今後は首都等の都市のみならず地方部までも含め、生保の普及度や浸透度が上昇することが予想される。人々の生活水準が向上する中では、貯蓄や資産運用に関わるニーズに伴い投資型保険への関心は高いものと推量されるが、同時に各国における都市化・核家族化の進展に呼応して保障性商品・年金のニーズが増すことが見込まれる。加えてマレーシア・インドネシアではタカフル、各国の貧困層にはマイクロ・インシュアランス（少額でシンプルな保険商品）の普及がさらに進むものと考えられる。ここで留意すべきは、東南アジアも含めたアジア新興国の生保市場における保険商品や販売チャネル・手法の導入や進展の在り方が、必ずしもわが国を含めた先進諸国が歩んだものと同じパターンにはならないということである。即ち、それらの市場には、先進国の保険企業が最新の商品や販売手法を持ち込んでおり、様々な商品・販売手法が共存・混在する形になっていることにも注目する必要がある。

(参考) 世界の生保市場動向については、保険・年金フォーカス 2012 年 4 月 23 日「保険料で見る世界の生保市場 2010 – スイス再保険のデータから –」

(<http://www.nli-research.co.jp/report/focus/2012/focus120423-2.pdf>) をご参照いただきたい。